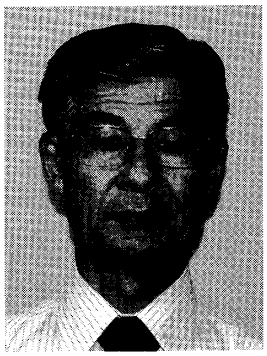
新年の挨拶

OR学会の広報を考える



日本オペレーションズ・リサーチ学会副会長
(財)電力中央研究所　理事
鈴木　道夫

OR学会員のみなさん，新年あけましておめでとうございます．

今野会長の新年のごあいさつを目にしたのはついこの前だと思っていましたのに，「次の新年号のあいさつは副会長が書く慣例です」とのお達しが届いたのは，まだクールビズで過ごしていた頃でした．そこで，副会長として，特に担当してきた学会の広報活動についてPRを兼ねて記すことにします．

2年前，私が真鍋・前副会長から担当事項として引継いだのは，情報コミュニケーション委員会でした．この委員会は，OR学会のWebサイトやメーリングリストを整備することを目的に設置されたものですが，委員の方々の精力的な尽力により，私が引継いだ時点で既に大方の仕事は片付くところまで来ておりました．一方，理事会では，渉外活動の強化や支部活動の一層の反映と並んで学会広報活動の強化が叫ばれ，17年度より新たにそれぞれの担当理事を設けて推進することになりました．そこで，これまでの情報コミュニケーション委員会を核として，OR学会の広報活動を担う広報委員会へと発展させることになり，引き続き副会長としても担当を引継ぐこととなったわけです．

さて，OR学会にとって，広報活動がどんな意味を持つか，またそのためにどんなことが必要かをみなさんと一緒に考えてみたいと思います．

しばしば，広報は企業の顔だと言われます．つまり，企業などの組織が社会に対してどのように映るかは，その広報に影響されること大だという意味でしょう．学会は企業のような営利活動をするわけではありませんから，営業的な宣伝目的の広報は必要ないかもしれませんが，やはり一つの社会的な存在として社会から認知され，その活動を高く評価されることが大事ではないでしょうか．その目的は，ORを志す研究者の集団として，ORの価値やおもしろさを理解してくれる人を一人でも多く増やし，われわれの仲間に加わってもらうことにあると思います．こうした目的での情報発信が，その質と量において極めて重要な意味を持つと考えます．これまでの情報コミュニケーション委員会が進めてきた学会Webサイトの改善などは，広報活動の基盤整備でもあったわけです．

しかし，ここで考えなければならないことは，何を情報発信するかという問題です．いろいろ発信すべき情報は多岐にわたると思いますが，突き詰めればOR学会がどんな活動をしているかという点に尽きると言えるでしょう．そして，それがどれだけ価値があり，どれほど面白いことなのかということに懸かっているのではないでしょうか．こうした発信すべき情報の中身は広報活動自体から生まれるものでないことは論を待つまでも無いでしょう．これこそ研究者一人ひとりの，そしてOR学会の活動そのものです．

広報は，こうした活動全体をどのような形，方法によって社会に伝えてゆくかという活動と言ってよいでしょう．このため，OR学会のさまざま

な活動との密接な連係が必要となるため，現在，広報委員会では機関誌編集，論文誌編集，研究普及，庶務の各担当理事にも委員として参画していただき，それぞれの活動を広報という一つの横糸によって結びつけながら，それら全体をどのような形で社会に伝えてゆくのが良いかを模索しているところです．

こうした体制は，広報委員会がもう一つの役割を果たすことにもなるのではないかと考えています．それは，広報委員会が他の各委員会からその活動状況などの情報を受けて外に情報発信するのとは反対に，外からOR学会に向けられた情報をそれぞれ関係する委員会に伝えたり，情報の相互連携的な事柄に関して各委員会での活動を支えたりすることです．特に，研究活動や運営に関わる情報の電子化は，その典型的な例といってよいでしょう．

このように，OR学会における広報活動は，極めて多面的な様相を呈していますが，私はこの全体の枠組を次の2つの軸に沿って捉えたいと思っています．その一つの軸は「活動の対象」であり，学会の内と外，すなわちOR学会員と非会員もしくは社会の視点です．もう一つの軸は「情報の方向」であり，情報の発信と受信（前者を広報，後者を広聴と呼び，両者を併せて広報・広聴活動などと言われることもあります）の視点です．これら2つの軸をクロスさせ，それぞれの2つの区分で作られる4つのセグメントを考えることにより，広報活動が果たすべき役割が見えてくるように思います．狭い意味では，非会員や社会といった学会の外に向けて，OR学会の活動の様子を伝えるための情報発信が広報活動といえるでしょうが，この枠組から見れば，それは役割の一つに過ぎないことが分かります．

例えば，情報発信の裏には情報の受信の役割も必要だということであり，この中には，OR学会への問い合わせなどはもちろん，学会への批判やクレームなどネガティブな情報に耳を傾けるといったことや，社会の変化や動向にも感覚を研ぎ澄まして関心を寄せることなども含まれるといえるでしょう．

同様にまた，OR学会内の各委員会や会員に対しても，それら相互のコミュニケーションの促進を援けることや情報の提供という面でのサービスの向上を図ることなども大切な役割といえるのではないでしょうか．さらに一歩進めて考えれば，前に述べた外部からの情報受信，すなわち広聴活動を意味のあるものにするためには，その受け止めた情報をOR学会の活動に生かすための工夫までも，その役割の一部だと考えることが大切なのではないでしょうか．

もちろん，こうした多岐にわたる活動を広報委員会が単独でできるものではありません．それゆえにこそ，OR学会が持つさまざまな委員会などとスクラムを組んで，電子化など広報活動の基盤を整備しながら，少しずつではありますが着実に進展させることが大切だといえるでしょう．そして，何よりも大切なことは，OR学会として発進するに足る，そして社会がそれに注目するに値する情報を創出することです．そのためにも，社会に目を向けた研究への取り組みが大切といえるのではないでしょうか．

今年は2006年．来年にはOR学会創立50周年の大きな節目の年を迎えます．50年の歴史を踏まえ，新たな50年の発展を期するに相応しいいくつかの記念事業が企画されるものと思いますが，50歳を迎えたOR学会の顔として恥ずかしくない広報活動に育て上げるべく，広報委員一同，知恵を絞り汗を流してがんばりたいと思っています．

新年にあたり，OR学会員のみなさんのご協力を切にお願いいたします．また，広報活動に対するみなさんのお考えやご要望，そして励ましも含めてご意見をお寄せください（これも広聴活動の一つでしょうか．jimukyoku@orsj.or.jp）．